

今、世界のどどこかで——ノンフィクション作品の紹介をしよう

筑波大学附属中学校教諭
ほそかわりか
細川李花

使用教材：「エルサルバドルの少女ヘスース」（三年）※本実践では二年を対象とした。

1 はじめに

世界で起こる災害や事件、私たちが直面する課題について、生徒たちはテレビ等の報道を通じて触れている。しかし、日常の中で、それら自分から遠い出来事とは距離を置きがちになる。未来を築く彼らには、広く世界に目を向け、解決すべき課題を認識したうえで日々を過ごしてもらいたい。

本教材は、遠くエルサルバドルで生きる少女に焦点を当てたノンフィクションである。筆者は、長年にわたって何度も現地を訪れ、少女を取材し続けた。

筆者特有の視点や思いが表れた本教材をきっかけとして、生徒に、さまざまなノンフィクション作品と出会わせ、その魅力を感じさせたい。私たちが直接知りえない人々の姿を伝えるノンフィクションというジャンルの文章に親しむ第一歩として、本単元を設定した。

2 指導計画（全五時間）

■目標

- 工夫を取り入れながら、ノンフィクション作品の魅力や短い文章にまとめる。
- ノンフィクションを読み、世界で起きている出来事や筆者の思いについて自分の考えをもつ。
- さまざまなノンフィクションに出会い、広く世界を知る意欲をもつ。

第一次（一時間）

ノンフィクションと出会う

- ・身近な話題を扱ったノンフィクション作品に触れる。
 - ・「エルサルバドルの少女ヘスース」を読み、印象に残ったワンフレーズを挙げる。
- 第二次（二時間）**
本の魅力を文章にまとめる
- ・教師が作成した「紹介文モデル」を読み、ノンフィクション作品の魅力を伝える

が置かれた状況や取材の様子を詳細に書く」「取材対象や筆者の生き方・考え方に対する自分の考えを書く」等の要素が挙げられた。それらを踏まえ、紹介文に書くべきこととして、次のような点を押さえた。

- ・取材地の詳細・取材方法・取材対象
- ・ワンフレーズについての説明
- ・ワンフレーズから考えたこと
- ・自分にとっての、その作品の意味

これらの要素を理解し、生徒はとまどことなく書くことに取り組んでいた。また、取り上げたフレーズの異なる三種類のモデルを目にすることで、作品は同じでも、挙げるフレーズは人によって異なるという点に気づいたようだった。その後、自分が選んだ一冊から、最も魅力的なフレーズを見つけてよとする姿が目立つようになった。

(5) 手引きを参考にして発表会を行う

生徒が発表会の流れをイメージできるように、「紹介文モデル」をもとに、資料の提示のしかたや話の構成などのヒントを示した「発表会の手引き」を作成して提示した。

4 おわりに

発表会では、一人一人の紹介が進むたび、世界地図にシールが増え、生徒は世界各地

紹介文に書くべき内容を考える。
 ・自分が選んだ本の紹介文を、四百字程度で書く。

第三次（二時間）

本を紹介し合う

- ・自分が選んだ本の紹介をする。
- ・友達の紹介を聞き、読みたい本を挙げる。
- ・全員で紹介文をまとめた冊子を読む。

3 指導の工夫・学習の実際

(1) 身近な話題を扱った作品に触れる
 単元の導入として、『いのちの食べかた』（森達也／イースト・プレス）等、複数のノンフィクション作品の一部分を生徒に紹介した。外国での出来事を取り上げた本教材に出会う前に、生徒にとって身近な話題を扱った作品に触れさせることで、「身近な事柄であっても、知らないことは多い」という事実が気づかせ、知ろうとする態度の重要性を実感させることをねらった。

で起きている出来事や、友達が紹介する本に興味をもったようだった。普段は小説に興味を抱く生徒が多いが、本単元をきっかけに、彼らがより広く世界を知ろうと求め、ノンフィクション作品にも手を伸ばす機会が増えることを期待したい。

生徒が書いた紹介文

▼わたしの心をとらえた一文

でもいつか日本人はこんなふうになっちゃたんだろう

○著者：…ルネ・ド・ポンピエ
 ○著者：…杉本裕明 ○出版年：…二十五年 ○出版社：…若狭書店

これは東松山市の中古家電輸出業者の社長、小林茂さんの言葉である。国内のあらゆる場所から集められた家電製品は、不要回収業者の手により、倉庫に運ばれ、検査・査定されたあと、途上国に輸出される。輸出される前の倉庫の中には、ほぼ使用されていないまま手放された新商品が積まれている。小林さんはその山を見ながらそう呟いた。私はこの言葉が物々大切に使い続けるという、日本人の美徳のようなものが失われつつあることを痛切に感じていると思った。例えば掃除機が突然壊れたとき、多くの人は修理せず、新品に買い換える。店に行けば製品が沢山あって修理代を支払うよりも安価に手に入る。このような消費品の増加も、昔から修理を繰り返して使い続けてきた日本人の行動を変化させたのだろう。実際の不要回収業者がゴミ処理場の現場から、使い捨て文化が浸透し、物に対する敬意をなくした日本人の事態に気が付かされたこの手を、お勧めしたい。